

M.ドアティ:2つのヴィオラのためのヴィオラ・ゾンビ

アイオワ州の音楽一家に生まれたマイケル・ドアティは、アメリカの現代音楽作曲家。2本のヴィオラのための「ヴィオラ・ゾンビ」は1991年の作品で、ヴィオラ・デュオのための貴重なレパートリーとなっている。ドアティはポップ・カルチャーの採り込みにも積極的で、驚きと恐怖に満ちたサウンドがホラー映画「トワイライト・ゾーン」のテーマを想わせる。

松崎国生:無伴奏ヴィオラ・ソナタ 第3番《海》

高知県出身の作曲家・松崎国生は、独学で作編曲を学んだ。「エリーゼとかのために」等、古典の名曲をユニークにアレンジした動画でも知られており、今やクラシックのみならず多方面のジャンルで活動している。松崎の無伴奏ヴィオラ・ソナタは、音楽学者・瀧井敬子委嘱によるヴィオラのための無伴奏作品のプロジェクトで、全6曲を目指してスタートした。すでに第1番《Rinka》(2023)と第2番《冬》(2024)は中村翔太郎によって初演されており、第3番《海》は本日が世界初演となる。

G.ノックス:マラン・マレ変奏曲《スペインのフォリア》の主題による

ガス・ノックスは、アイルランド出身の現代音楽作曲家兼ヴィオラ奏者。ヴィオリストとしてアンサンブル・アンテルコンタンポランやアルディッティ四重奏団など現代音楽に特化したアンサンブルを渡り歩き、コンテンポラリー作品を数多く初演してきた。2008年、作曲家として書いた本作で主題に用いられているのは、ルイ14世の宮廷で活躍した巨匠マラン・マレの代表作とも言える「スペインのフォリア」で、1701年出版のヴィオール曲集第2巻に含まれる長大な変奏曲である。

野平一郎:「トランスフォルマシオンⅠ」、「トランスフォルマシオンⅡ」

東京出身の野平一郎は、ピアニスト・作曲家としての業績はもとより、東京文化会館音楽監督、東京音楽大学学長を務めるなど、多方面で活躍している。4本のヴィオラのためのこれら2曲は、J.S.バッハ《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番》終楽章に置かれた大曲「シャコンヌ」のトランスクリプション作品。ヴィオラスペース2000の委嘱により書かれた「トランスフォルマシオンⅠ」は古典的なスタイルのいわゆる「編曲」だが、ヴィオラスペース2001の委嘱による「トランスフォルマシオンⅡ」はより現代的なスタイルで、編曲と作曲との狭間にあるような作品となっている。作曲者は2作を続けて演奏することを推奨しており、それにより浮き彫りとなった相違を聴くことができる。